



発行所
網走南ヶ丘高校
新聞局
発行責任者
我妻孝介

用語集

・体温調査：毎日の体温や体調の記録を提出する。感染対策や感染者が出た場合の対応に活用。
・家庭学習調査：前日の学習時間を記録、提出する。学習習慣の定着を促す側面もある。

緊急特集 南高ICT化実態に迫る 提出4割 多角的改革を

今年度から南高では体温調査と家庭学習時間調査の2つをGoogleフォームを活用して各個人のスマートフォンから提出する方式(以下「新方式」)に変更した。2つの調査は学校生活を送る上で非常に重要なものである。しかし、その提出率は高いとはいえない。報道局では生徒・教員の声を聞くとともに、南高ICT化の実態と改善のてだてを探った。

提出率の実態をみる

報道局では教務の先生から4月のある10日間にわたる2・3年次の体温・家庭学習調査の提出率をいただいた。全体の提出率は45.8%だった。調査した全8クラスの内、提出率が5割を超えたのは3年A組(74.9%)、B組(69.7%)の2クラスのみだった。感染対策や学習習慣の定着と密接な

低迷の原因を探る

つながりがある以上、この数値は問題であると言わざるを得ない。報道局ではあるクラスの生徒39人にアンケートを実施した。回答者数は38人(回答率97%)。1つ目の提出頻度に関する質問には、「週5日以上提出する」と答えた生徒は3人、「毎日提出している」と回答した生徒に

出したが、スマホが使えず提出できなかった」といった声も上がっていた。学級もしくは年次ごとに体温計を常備し、登校してから朝のホームルームが始まるまでの時間、教室内での携帯電話の使用を許可するなど、既存のルールに囚われない対応も提出率向上のためには必要である。システムのICT化は「目的」ではない。学校運営のさらなる効率化に向けた「手段」の一つと考えるべきであろう。ICT化が無用の長物になることのないよう、学校全体のシステムを築いていくことが重要であり、生徒側もICT化に対して積極的な意見を伝える事が大切だろう。

「習慣化が大切」

養護教諭・村上先生に聞く

最初に、新方式導入の経緯を聞いた。村上先生は、「紙媒体の提出方法だと、全校生徒分の記録用紙を印刷する必要があることに加え、提出当日にまとめて書く生徒も多かった」と紙媒体の問題点を挙げたうえで、「自主的に体温を測り、自身の体調を把握する」習慣づけを行う為に新方式の導入を決断したという。昨年度の2月、感染者が発生し学級閉鎖となった2つのクラスで試験的に活用した上で、全校に導入したそうである。体温調査の結果と感染状況のつながりは顕著に表れており、年度初頭に発生した校内での新型コロナウイルスの流行では体温の上昇が見られた生徒が直後に陽性と判明するなど、決して形式的な物ではないことが分かる。また、フォームの最後にあるひとこと欄について、「体調や回復の報告などを伝えてくれる生徒が多くなった」と話してくださった。提出率の低迷に関しては「自分の体調を把握することは重要、習慣化が大切」と話す。部活動においても、「体温調査の記録がないと大会などに出場できない場合もある」と注意を促した。現在は村上先生のみならず、各学級や各部署からの呼びかけなど、多方面から提出率向上に向けた取り組みが行われているという。

「(コロナ禍に関わらず)自分の体調を知ることが良い習慣。やって損はないので今後も長く続けてほしい」と締めくくった。

報道局が提案する 提出率向上のてだて

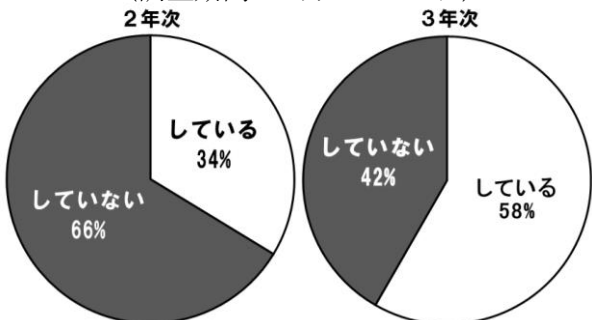
- ・朝 HR での携帯電話使用許可
- ・学級に一台 chrome book の設置
- ・玄関に啓発ポスターを設置
- ・提出フォームのリンクを増やす(学校 HP、マ・メールなど)

「局員ゼロ」からの復活 再立ち上げ秘話を聞く

新企画「南高あの先輩に学ぶ」第1回は7年前、局員のいなくなった新聞局を復活させ、現在は民間企業に勤める大西創也さんに話を伺った。

2・3年次の提出率

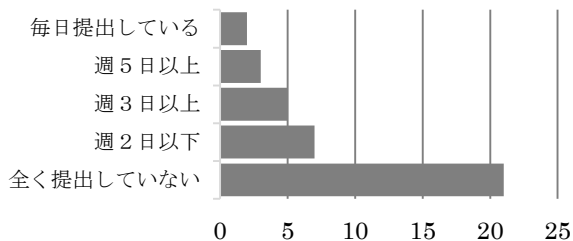
(調査期間：4月12～21日)



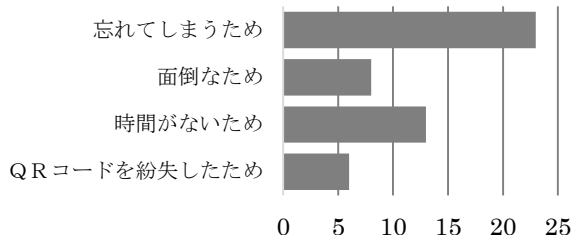
提出率に関するアンケート

(調査日：5月11日)

提出頻度



提出できない理由



提出率向上のために

ところで、呼びかけや啓発活動も重要だが、生徒の調中には、「登校してから調査を提出する」を思い

開校100周年記念
報道局特別連載企画

南高「あの先輩に学ぶ」

大西創也さん
(本校新聞局元局長)



「普段は何となく生活していたが、南高祭とか、行事には熱意を持って取り組んでいた」南高での3年間を大西さんはそう振り返る。「記憶に残っている先生は？」という局員の質問には「当時の新聞局顧問、工藤先生」と答える。「あの先生は良かった。好き勝手やら

せてくれた」と感謝をにじませた。続いて、新聞局(現報道局)再立ち上げの理由を聞くと、大西さんは「面白そうだったから」と、はにかみながら答える。当時の新聞局はほとんどゴミ置き場の初仕事はそのゴミ袋を片付ける所からだだったという。新聞制作も「バックナバー」を参考に、見よう見まねで作った」と、当時の苦労を語った。「夜は10時頃まで残って作業することも。ウケ狙いでもあったとを後悔するときもあった」と、多忙な新聞局1年目の思い出を振り返った。次回は2年目以降の新聞局の思い出、そして現在に至るまでの軌跡を聞く。

